

## 第2回委員会及びその後の意見照会における委員意見と対応

区分欄の色分け □ :委員会後の意見照会で作された意見  
□ :委員会で作された意見

区分	修正意見	委員意見への対応	参照ページ
	漁業人口のグラフは琵琶湖の漁業経営体数の変化を示しており、漁業従事者数とは異なる。本文記載も修正が必要。	グラフ中の数値は経営体数ではなく漁業就業者数を整理しているため、タイトル等を正確に記載した。	18
	漁獲量推移グラフの「その他魚類」には琵琶湖で駆除された外来魚の重量も含まれている可能性があるため、それらは除く方がよい。	その他魚種には外来魚などが含まれ、その内訳は不明であるため、その他についてはグラフより削除し、タイトル等を修正した。	18
	下水道の普及率ばかりが論議されているが、それへの接続率がどの程度進んでいるのかが判れば記載願います。	接続率を表す水洗化率を追加整理した。	20,21
	下水道の効果は、これまでの浄化槽やくみ取りによる処理と下水道での処理でどの程度琵琶湖への負荷が削減されたのかで、議論されるべきではないか。	「H21点検委員会報告書」より、負荷削減推定値を記載した。	20
	淡水赤潮の原因藻類として「黄金藻類」より「黄色鞭毛藻類」のほうが一般的。	黄色鞭毛藻類と修正した。	39
	水草の分布域の拡大だけが記載されているが、繁茂水草の種類の変化も分析し記載すべき。	「平成14～15年度琵琶湖沿岸帯調査報告書」より、水草の種類や現存量の推移について記載した。	43
	湖岸の整備において、「設置の際、約12kmが湖辺を埋め立てて整備された。」の記載で重要なのはヨシ帯であったことで「設置の際、約12kmがおもに湖辺のヨシ帯を埋め立てて整備された。」と記載すること。	「琵琶湖総合開発事業による湖岸堤の整備により、昭和51年から平成3年にかけて約50kmの湖岸堤が設置されたが、その際に約12kmがヨシ帯を含む湖辺を埋め立てて整備された。」と記載した。	50
	圃場整備によって琵琶湖と水田域が隔絶された影響は魚類などにとって大きいものと考えられることから、「湖辺の水田の圃場整備は、琵琶湖と水田との繋がりを断ち、産卵など生物の移動を阻害する状況をつくる結果となった。」を追加すること。	「ほ場整備により、米だけでなく良質な麦や大豆を生産することが可能となった一方で、農地からの排水を促すためにほ場と水路に段差を設けたことにより、魚の移動を妨げるような状況となった。このため、滋賀県では、農業の多面的機能を発揮させる観点からも、魚が水路からほ場の上りやすくする調査・研究を独自に進め、「魚のゆりかご水田推進プロジェクト」が平成13年度より実施されており、平成21年度までに26地区111haが整備されている。」と記載した。	50
	ヨシ帯の面積変化だけでなく、残存ヨシ帯のヨシの株立ちなど質の低下を記載すること。	「株立ち等のヨシの質的低下が生じていることも指摘されている。」と記載した。	54
	魚類などが利用できる水ヨシ帯の面積変化も記載すること。例えば、昭和28年:260.8ha, 昭和49年:99.2ha, 平成15年76.0ha	既往データの面積算定の考え方が異なり、一概に経年的な比較ができず、また、他計画との整合を図るため、記載していない。	54
	「琵琶湖と内湖や内湾の間には湖岸堤や水門が設置され、生物の移動を阻害している。」を追加すること。	「琵琶湖と内湖や内湾の間には湖岸堤や水門が設置され洪水や風浪への安全性を高めたが、生物の移動を阻害しているところがある。」と記載した。	57
	琵琶湖の底質は砂礫底が減少して泥質面積が増加していることを指摘すべきである。	「平成14～15年度琵琶湖沿岸帯調査報告書」より、沿岸部の泥質面積の推移について記載した。また、北湖及び南湖中央付近の底質経年変化について記載した。	61,62
	漁業人口当たりの総漁獲量推移において、漁業経営体数で割っているので数値が間違っている。	グラフ中の数値は経営体数ではなく漁業就業者数を整理しているため、注釈等を正確に記載した。	64
	アユ資源の増加は琵琶湖の富栄養化による餌料プランクトンの増加などによるものではないか。「人工河川の導入や、産卵場所の保護などで、」を削除。	削除した。	64
	生息貝類調査結果からシジミ類が減少して泥質に生息するタテボシガイが増加していることを記載すること。	「平成14～15年度琵琶湖沿岸帯調査報告書」より、タテボシガイ推定現存量の推移について記載した。	65
	在来魚の急減に関する記述を「ニゴロブナなど仔稚魚期に沿岸で過ごす在来魚への外来魚の捕食圧がかなり高いものと考えられる。」としてはどうか。	「ニゴロブナなど仔稚魚等期に沿岸部で過ごす在来魚に対する外来魚の捕食圧が非常に高いものであると考えられる。」と修正した。	70
	南湖は大半が外来魚で占められている状況を記載すべきで、「南湖では、エリで漁獲されるほとんどが外来魚でしめられている。」を追加記載。	追加して記載した。	70
	河口部に設置されていたヤナや内湖の小型のカワエリなどがほとんど消えてしまったことを記載すべき。	ヤナまたカワエリによる漁獲量データを追加整理した。	76

区分欄の色分け  :委員会後の意見照会で出された意見  
 :委員会が出された意見

区分	修正意見	委員意見への対応	参照ページ
	琵琶湖関係の研究論文の発表数などを指標に、研究対象としての琵琶湖への関心度の変化を記述してはどうか。	研究論文の発表数については、対象とする範囲が明確ではなく、全体数を適切にモニタリングすることが難しいため、指標として整理しない。	80
	「河川からの過剰な取水をやめ、本来の河川水を川に戻すことが必要である。」の追記。	ご指摘については、現状整理や施策展開における重点事項等として記載した。	141
	「今後は、生物生息空間の回復・維持および質的向上を視点とした・・・」とするべき。		151
	在来生物の生息数の定期的モニタリングが必要である旨を記載すべき。		155
	水位低下対策として設置された湖岸堤や水門は、ヨシ帯や内湖、水田など水辺と琵琶湖との間を分断し、多くの生物の移動を阻害して生活史のサイクルを循環できないようにしていることはすでに明らかなので、このことを謙虚に認めた上で、今後どのような改善策があるのかなど検討することは、これからの10年間の琵琶湖の保全を考える上で基本となるものとする。記載方法はいろいろあろうが、10年後に後悔しないためにも是非この問題を真正面から受けとめる記載が必要。		50-58 155
	現在の水位操作はホンモロコやニゴロブナなどの産卵に大きな影響があることは周知の事実であり、すでに規則の範囲内で試行が実施されている。水位操作におけるこれまでの問題点を記載すべきである。		59,60 155
	山から里、湖への物質循環の解明が今後の琵琶湖の総合保全に欠かせない課題であると考えられるので、その記載。		155
	総合的な保全の必要性の記述に、「さらに、人があまり手を加えなくてもヨシ帯や内湖など重要な生物生息空間が持続的に維持されるような自然のシステムを回復させる努力が必要である。」を追記。	追加して記載した。	88
	総合的な保全の必要性にある「環境に負荷を与えざるを得ない地域の主体的な・・・」について内容が判る記述が必要。	都市活動が展開されている地域を指しており、追加して記載した。	88
	計画展開の方向性の記載にある「第1期計画では・・・自然的環境が増加した。」文章がわかりづらい。	表現を修正した。	93
	保安林、水源かん養率の推移の図中の水源かん養率の意味が分かりにくい。内容は水源かん養保安林面積率かと思えますので、そのことが分かるように修正する。	水源かん養率について削除し、タイトル等を修正した。	46
	水源環境の地域別施策の表において森林・山地と市街地が空欄になっていることから、施策を記入する方がよいのではないか。	これまでも湖北・湖南地域とも同様の施策が展開されており、全体で実施する施策として記載した。	143
	外来植物についても整理する必要がある。	外来生物に関する現状を追記した。	70
	今後、PDCAサイクルを実施していくための指標として、アウトカム指標とアウトプット指標の関連性や新たな知見の反映を検討していく必要があることを記載する必要がある。	検討の必要性について記載する。	93,115
	水質の経年変化については、水質保全に係る既往の主要な条例や施策について記載する必要がある。	水質の経年変化図の中に、主要な条例や下水道の整備率等について記載した。	30
	水質については、水道水源や水辺利用（レクリエーション）などの視点から衛生的問題についても整理することが重要であり、関連するデータを追加して分析する必要がある。	湖内で観測されている大腸菌群数や水浴場水質調査結果（ふん便性大腸菌群数等）のデータを追加整理した。	32
	琵琶湖下流域の水質（琵琶湖からの流出水の水質）についても追加して整理する必要がある。	瀬田川などの琵琶湖下流河川の水質データを整理し、下流側の状況について追記した。	37,38
	場で整理しているが、水・物質の流れが分かりにくくなっており、そのつながりが重要である。例えば、市街地における生活排水や工場排水、農地における畜産系負荷などが記載されておらず、必要とされる機能や課題が明確でない。	報告書で対象とする場の定義と機能を追記した。また、従来から継続する施策と第1期の主要課題から抽出し重点的に実施する必要のある施策を合わせて整理した。	93,94 123-127
	温暖化対策や資源の循環といった視点で見ると、場をどうやってつないでいくかが重要であり、分かりやすく見せる必要がある。		
	目標と指標の関係について、科学的相関等を見えていく必要がある。	保全対策分野それぞれにおいて、施策の構成を整理する中で、各場における対策項目及び事業と進捗管理指標について見直した。	123-127 143-146 157-162

区分欄の色分け   :委員会後の意見照会で出された意見  
  :委員会が出された意見

区分	修正意見	委員意見への対応	参照ページ
	例えば工場等で水を繰り返し有効に使っている再生利用率などの効果として直接表されないが効果につながるもの(流域の努力)を表す指標は必要ないか。	効果につながるものは規制等のソフト的対策と関連するが、ここではソフト対策に関連する指標は設定しない。なお、ソフト対策以外の施策と関連する指標で、現時点ではその効果を把握することが難しいものについては、今後のモニタリング等を踏まえ、指標として追加していくことを記載した。	102
	P32記載のPRTRIについて、水域に関するものを区分して整理するとより良い。	データを追加整理した。	41,42
	P86記載の目標・指標の設定に関する視点について、地球温暖化に関連する課題などの視点を盛り込む必要がある。	地球温暖化等に関連する課題は、長期的な視点に基づく対応が必要となる事項として、総合的な保全の必要性や多面的な視点で記載した。また、湖底層の低酸素化など今後調査・研究を進めるべき事項として記載した。	88,97 120,121
	これまでは平常時を対象とされてきたが、突発的な問題(出水時、水質事故時等)への備えも重要となることを記載する必要がある。	計画策定の視点(多面的な視点)の中で記載した。	97
	P105記載の連携の取組について、都市と農村や産業界との連携等を明記する必要がある。	連携の取組の中で記載した。	164-172
	場のつながりを考慮することは重要であり、山から川を通じて琵琶湖へ供給される土砂の連続性に関する改善は行っていく必要がある。	施策の重点事項(調査・研究)として記載した。	155
	湖岸堤、水門、水位操作に関する課題についても記述していく必要がある。	施策の重点事項(調査・研究を含む)として記載した。	152,155
	河川流量については、水質や自然的環境との関係からも重要な指標であり、検討していくべき事項である。	他分野との関係の把握が必要であること(調査・研究)を記載した。	141
	課題と施策の整理については、担い手やコミュニティの減少に対する支援が重要であり、これら認識とNPO等の参画・協働とが繋がってくるものだと考える。	担い手育成等に関する施策の必要性について記載した。また、連携の取組の中で、NPO等の参画・協働の推進について記載した。	138 164-172
	コミュニティにおける地域固有の知識や経験を活かした活動を評価していく必要がある。	連携の取組の中で、地域固有の知識や経験を活かした活動を推進していくことを記載した。	164-172
	P105記載の連携の取組について、確実に計画における基本的な考え方が実行されるよう努力すべきであり、施策との関連性を記載する必要がある。	連携の取組の中で、NPO等の参画・協働の推進について記載した。また、アンケート結果等を基に、施策等への参加・協働の可能性等について記載した。	164-172
	大戸川流域は計画対象地域であるのか。計画対象地域について、対象地域図と文章を適切に示す必要がある。	計画対象地域を明確に示すよう、図及び表現を修正した。	96
	場として、農地の定義を明確にする必要がある。また、施策等に畜産系負荷等への対応を追加する必要がある。	報告書で対象とする場の定義と機能を追記した。また、従来から継続する施策と第1期の主要課題から抽出し重点的に実施する必要のある施策を合わせて整理した。	93,94 123-127
	水質保全の指標として河川への流入水質とあるが、地下水の水質をモニタリングしていくのか。適切な表現に修正すること。	河川水質のモニタリングを対象とし、表現を修正した。また、地下水水質(汚濁)状況について現状の整理を追加した。	45,116
	農用地と農地という表現が混在している。定義を明確にし、適切な表現とすること。	報告書で対象とする場の定義を記載し、表現を修正した。	93,94
	指標として、整備面積だけでなく、人の手が入っていない湖辺域の面積や良好な自然が残っている面積といったものが必要であり、そういったものが減少していないということが重要となる。	指標として、整備だけでなく自然状態で保全されているものも含む保全整備面積と修正した。また、これまでにモニタリングされている自然湖岸の割合を追加した。	157
	自然的環境のアウトカ指標として、種数や個体数に加えて、分布域(生息域)を追加する必要がある。また、水辺植物や鳥類についても記載する必要がある。	調査・研究が必要なアウトカム指標として分布域を追加した。また、水辺植物や鳥類についても追加した。	116
	水位操作に関する検討について、施策課題に明記する必要がある。	施策の重点事項(調査・研究)として記載した。	155
	湖岸の攪乱のあり方を研究課題に追加する必要がある。	調査・研究課題として記載した。	155
	琵琶湖の価値と指標とは結びつくものであり、そういった視点に基づく整理を行うことは重要である。	琵琶湖の価値を類型化して整理を行い、機能と関連付けた整理を行った。	3-5



区分欄の色分け  :委員会後の意見照会で出された意見  
 :委員会で出された意見

区分	修正意見	委員意見への対応	参照ページ
	現時点のアウトプット指標とアウトカム指標だけで評価するのではなく、今後の調査・研究等から得られる新たな知見を反映していくことが重要である。	PDCAサイクルを実施しながら、今後の調査・研究等から得られる新たな知見も反映し、目標及び指標について見直していくことを記述した。	93,99 102
	アウトカム指標は現時点で目標水準の設定等が難しい項目が多く、今後施策と指標との関連性の把握も含めモニタリング等を実施していく必要がある。		
	PDCAサイクルによる計画の見直しを実施していくことが重要である。		
	場を意識しすぎると縦割りのイメージが強くなるため、場毎の施策に加えて、例えば流域全体での総合的な施策が重要となる。	連携の取組の中で、総合的な取組の必要性について記載した。	173-174
	既往モデル等も含めた水質汚濁メカニズム等の検討を実施していく必要がある。	水質汚濁メカニズムの解明に関する調査・研究の推進の必要性について記載した。	120,121
	第2期計画目標の内容については、事務局案で良いと考えるが、将来的には、保全3分野を踏襲しそれぞれ進めていくべきかどうかは議論が必要であり、総合保全のために分野間の連携を推進していく必要がある。	多角的な視点及び連携の取組の中で、分野間の連携を推進する必要性を記載した。	97 173-174
	アンケート回答数が少ないため、今回の結果は全体の傾向を必ずしも表しているとは言えず、参考値として検討する必要がある。	今回のアンケート結果は参考として整理を行い、連携の取組の中で、NPO等の参画・協働の可能性のある項目について記載した。(追加してアンケートを実施)	164-170
	参画・協働の可能性の整理では、現在の活動状況に加えて、今後の可能性も含め整理する必要がある。	アンケート調査結果等の現状の活動状況を基に、NPO等の参画・協働の可能性のある項目について記載した。	164-170
	水源かん養分野のアウトプット指標として、森林管理の担い手を表す人数(育成状況)が考えられる。	森林管理の担い手を表す人数(育成状況)として、地域の森林づくりを推進する集落数(琵琶湖森林づくり計画における指標)を追加した。	143
	アウトカム指標である流出量などについて、滋賀県森林センターによる森林の水源かん養機能の研究内容を調べて、その成果の利用が可能であれば重点エリア(モデル流域)における取組みとして取り上げてはどうか。	滋賀県森林センター等により、渓流水量等のモニタリングや調査・研究が実施されているが、継続したモニタリングや調査・研究によるメカニズム等の検討が必要なため、将来の目標管理指標候補として、渓流水量等をアウトカム指標として記載した。	116
	湖内環境基準値とそれぞれの項目の平均値とを比較しているが、平均値では環境基準を達成している項目についても、地点別に見ると達成していないものもあるため、より詳しく現状を整理する必要がある。	平均値と合わせて、平面分布や地点別の環境基準値の達成状況について整理した。	29,33